

横穴式石室に素焼きの棺を納めた古墳

あこだ
赤田 1 号墳（奈良市西大寺赤田町一丁目）

平成 26 年度に、奈良市内で初めて横穴式石室の玄室内に陶棺が納められた古墳が見つかりました。この古墳は、近鉄大和西大寺・あやめ池駅間の線路の北側にある尾根の東端で特別養護老人ホームの増築工事が行われた際に発見され、地名をとって「赤田 1 号墳」と命名しました。

陶棺とは、6 世紀後半から 7 世紀中頃にかけて近畿地方の中部や岡山県の東部でよくつくられた素焼きの棺です。奈良県内では奈良市の北西部で数多く出土し、そのほとんどが深く丸みを帯びた蓋と身からなり、身の底部に円筒形の複数の脚が付く「土師質亀甲形陶棺」です。多くの場合、丘陵の斜面に横穴を掘削して埋葬する横穴墓の墓室内に納められています。

墳丘東半部の基底部と周溝が残っており、その形状から本来は直径 18m 前後の円墳と推定されます。墳丘の盛土は後世に削平されたと考えられます。周溝は幅 2m、深さ 0.75m で、埋土から 7～8 世紀の土器や土馬などが出土しました。



赤田 1 号墳の位置 (1/30,000)

なお、同じ尾根の西方の南斜面には、6 世紀後半から 7 世紀中頃にかけて造られた赤田横穴墓群があります。これまでに 1～9 号墓の発掘調査を行い、その配置から 1・2 号墓（東群）、3～5 号墓（中央群）、6～9 号墓（西群）に大別でき、中央群が最初に造られたことや、2・6 号墓を除く横穴墓の墓室内に土師質亀甲形陶棺が納められていたことが確認しています。



赤田 1 号墳の全景（北西から）



横穴式石室・陶棺（南から）



陶棺と副葬品の土器



陶棺（奥）と石室内出土遺物（手前）

横穴式石室 玄室は掘形の内側に石を積んで造られており、左側壁の石積みが3段分残っていました。各段の上端を揃え、最下段は整地土を入れて高さを揃えています。陶棺を中央に安置したと想定すれば、内法は全長3.6m、幅1.8m前後に復元できます。一般的に玄門の前には石積みの羨道が設けられますが、赤田1号墳は盛土で墓道を構築しています。

陶棺 陶棺は土師質亀甲形で、棺身の約半分が残存し、蓋片もわずかに出土しました。

棺身は成形後に半分に分割して焼成しています。脚部は、片身で3本×3列を確認できることから、全体で6本×3列であったと推定できます。外側面には底面に沿う一条の横方向の突帯と、その突帯と蓋受け部をつなぐ縦方向の突帯が貼り付けられています。棺身の内外面には赤色顔料が、蓋には赤・緑色顔料が塗られていました。

出土遺物 陶棺内からは南東側で耳環（金環、耳飾り）1点が出土しました。

玄室内では、陶棺東側の床面で6世紀末～7世紀初頭の須恵器の無蓋高杯・杯蓋が各1点、玄門近くの床面から耳環（金環）2点、須恵器の甕片が出土しました。また、玄室南東隅近くの床面で8世紀の平瓶1点、玄門の近くで8世紀の土師器皿1点が出土しました。

特徴と展望 横穴式石室に陶棺が納められた古墳は、奈良市内では初めてで、奈良県内でも4例目です。奈良市内で出土した陶棺は、製作技術が埴輪と似ています。また、秋篠・菅原といった埴輪製作に携わった土師氏との関わりが深い地域で出土していることから、陶棺の被葬者が土師氏と関連する可能性があります。

赤田横穴墓群のすぐ近くで見つかった赤田1号墳は、単純に考えれば横穴墓と地縁的關係があり、単独に築かれた古墳であることから、横穴墓の被葬者より格上であることが推測できます。しかし、副葬品の内容や陶棺の大きさは横穴墓と変わりありません。赤・緑色に塗り分けられた陶棺も赤田横穴墓群の3号墓から出土しており、地位の高低を示すものではなさそうです。

興味深いのは、奈良市のすぐ北に位置する南山城地域では、陶棺が横穴式石室に納められる例が多く、横穴墓はほぼ皆無であるという傾向を示します。このように、地域によって埋葬施設と陶棺の採用に差異が認められることは、赤田1号墳の性格を理解する上で重要だと考えます。つまり、横穴墓と古墳という違いが単純な地位の違いにはなり得ない可能性を示しているのです。

このように多くの検討課題が残されていますが、赤田1号墳は奈良市の古墳文化の特質を考える上で貴重な資料であると言えるでしょう。